

戦後日本における「勤労青年」文化

——「若い根っこの会」会員手記に見る人生観の変容——

阪 本 博 志

0 はじめに

時代や社会について語るときに「若者」の文化やパーソナリティーは不可欠な要素を構成しているという認識が、今日一般になされている。例えば「社会的ひきこもり」(斉藤環)や「パラサイト・シングル」(山田昌弘)といった言葉を、その象徴として挙げる事が出来よう。むろん社会学においても現在の「若者」の文化やパーソナリティーの成立を歴史的に明らかにしようという試みが従来なされてきた。ところでこの「若者」という言葉であるが、若年層を社会全般において「若者」という言葉で表象するようになったのは実はそう古いことではない。中野収によると、この年齢層を指す言葉として「青年」にかわって「若者」を用いるようになったのは、1960年代からである¹。1960年代は、高度成長期であったと同時に、若年層を指す概念における「青年」から「若者」への移行期でもあったのである。本稿の課題は、この1960年代における「勤労青年」の意識変容を、勤労青年サークル「若い根っこの会」会員手記という質的データを主に用い、明らかにしていくことである。

以下の構成を簡単に述べたい。

続く1章では、従来の戦後「若者」文化史研究において高度成長期「勤労青年」への視点がその重要性にもかかわらず欠如していたことを明らかにする。そうした研究を乗り越えるためには1960年代「勤労青年」文化の姿とその変容を明らかにするべきである。そこでその考察の手掛かりとしての「若い根っこの会」の不可欠性を検討する。その上で「勤

¹ 中野収「若者像の変遷」井上・上野・大澤・見田・吉見編『ライフコースの社会学』岩波書店1996年、56頁。「青年」及び「若者」という語は現在一般には余り厳密に区別することなく用いられているが、本稿においては「青年」とは木村直恵が明らかにしているように明治の後半に現れた概念として考え(木村直恵『「青年」の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社1998年)、「若者」とは従来の民俗学的な意味で用いるのではなく後述するように1960年代以降から定着した概念として捉えることとする。

「勤労青年」文化の変容を明らかにする方法として、同会会員の言説を分析するという方法を採ることにする。

2章においては同会の沿革の紹介を行う。この作業の狙いは、「勤労青年」文化を代表する同会の1960年代における活動の全体像を明らかにすること、及び3章での手記分析のための導入、の二点である。

3章においては同会の会報に掲載された会員手記の分析を行う。分析においては、手記に描かれた会員の生活環境が変化を見せた1967年以降、手記の文脈において主要な位置を占めている「人生観」「根っこの会参加動機」がどのように変容したのかを、考察する。

4章では前章において明らかになった「勤労青年」たちの意識変容を、高度成長とそれに伴う社会変動の中で位置づける。

1 戦後「若者」文化史研究の批判的検討及び「若い根っこの会」研究のための問題設定

先述したように1960年代は「青年」から「若者」への移行期である。この移行を可視的なものにするために『朝日新聞』記事見出しにおける「青年」「若者」という語の使用数の変遷を示すと、以下ようになる²。この「青年」「若者」の使用頻度数の変遷から、我々はこの移行を、新聞紙上という言説世界においても、はっきりと見る事が出来る。また1970年代を「青年」から「若者」への転換期と位置づける事が出来る³。更に、1960・70年代において「若者」という言葉がどのような文脈で使われているのかを見ることで、当時この語が表象した具体的な内容を明らかにしていきたい。

	「青年」	「若者」
1950年代	825	9
1960年代	1158	209
1970年代	915	1050
1980年代	846	2153

² 『朝日新聞記事見出しデータベース』(CD-ASAX)による。

³ ただ、「青年」から「若者」への転換という事態に関して、同じ言説世界の中にあっても若干のタイムラグがあることを指摘しておきたい。小谷敏らはアカデミズムの世界においては70年代には「青年」という言葉が専ら用いられ80年代に入り「若者」が主に用いられるようになったということを指摘している(小谷編『若者論を読む』世界思想社1993年)。更に言説世界ではなく社会全般における日常的な発話においてこの転換がいつ頃起こったのかということは、また別の問題なのである。こうしたことから、これ以降述べる「青年」から「若者」への移行・転換という事態は便宜上あくまでも新聞記事に限定して論じていることを強調しておきたい。

それでは、どのような文脈で「若者」が語られているのかを以下に見ていこう。1960年代の209件のうち、37件が「働く若者」についての記事（それを描いたテレビ・ラジオ番組の紹介を含めると50件）である。そのうち33件が都会の零細企業の工員や商店の店員として住み込みで働く地方出身の「若者」を扱った記事で、このタイプのものが最も多い。また、「若者」を見出しに掲げた記事の中で日本の大学生について述べているものはない。一方1970年代の記事においては、「働く若者」にまつわる記事は27件であり、「若者」記事の大幅な増加とは逆に減少している。地方出身の「働く若者」にまつわるものは15件で、そのうち13件が1970年代前半のものである。また、1960年代の記事のうち、深夜の繁華街や夏の海や山へのレジャーといった「若者文化」の文脈で語られているものが25件、商業資本が「若者」を市場にしていることを報じたものが3件ある。

以上のことから、「青年」から「若者」への移行期である60年代当時においては、今日我々がイメージするモラトリアムの担い手としてよりも、むしろ労働の担い手として「若者」が表象されていたのではないかと考えることができる。「青年」から「若者」への移行期において、「若者」という言葉が表象する主な内容は、「勤労青年」だったのである。すなわち1960年代の「青年」から「若者」への移行期において、「若者」という言葉が表象する内容は(a)労働の担い手・(b)モラトリアムの担い手という二元的なものであった。一方、転換期である1970年代以降の「若者」の表象内容は(c)モラトリアムの担い手のみの一元的なものである。つまり「青年」から「若者」への移行・転換という事態に並行して、1960年代以降の「若者」という語の表象する内容は、(a)労働の担い手・(b)モラトリアムの担い手から(c)モラトリアムの担い手へという、二元から一元への移行という変遷をたどっているのである。

それでは、現在の「若者」文化の形成を歴史社会的な角度から明らかにしようとした従来の研究においては、この二元から一元への移行を踏まえた考察がなされてきたと言えるのであろうか。実際のところ、1960年代から1970年代以降における「若者」文化やそのパーソナリティーの成立を歴史的に論じた従来の論考⁴においては、1960年代におけるモラトリアムの担い手としての「若者」文化(b)から1970年代以降のそれ(c)へという

⁴ 代表的な論考として、幕末からの変遷を辿った坂田稔『ユースカルチャー史 若者文化と若者意識』勁草書房1979年、戦後の「若者」文化の変遷を論じた桜井哲夫『ことばを失った若者たち』講談社現代新書1985年、中野収『現代史のなかの若者』三省堂1987年、高田昭彦「サブカルチャーとネットワーク」栗原彬・矢澤修次郎編『知とモダニティの社会学』東京大学出版会1994年、岩間夏樹『戦後若者文化の光芒』日本経済新聞社1995年、小谷敏『若者たちの変貌 世代をめぐる社会的物語』世界思想社1998年、山田真茂留「若者文化の析出と溶解 文化志向の終焉と関係志向の高揚」宮島喬編『講座社会学7 文化』東京大学出版会2000年、などがある。

一元的な移行しか扱われてこなかった。1960年代当時高度成長を底辺で黙々と支えた「勤労青年」は同時代モラトリアムを謳歌していた「若者」と同じ「小さな人」（鶴見俊輔⁵⁾）であった。しかし、対抗文化といった、後者のジャーナリスティックな現象の影になり、前者が従来の歴史的研究においては捨象されてしまっていたのである。

このように「勤労青年」が忘れ去られてしまう事態が起こり得た原因として、次の二点を考えることが出来る。

それはまず第一に研究者本人が1960年代もしくは1970年代以降においてモラトリアムの担い手としての「若者」(b)・(c)であったために様々な事象を自分に引き寄せて考えたり、或いは知識人として大学で学生(b)・(c)と接触する中で受ける印象から感覚的な次元で論を進めているのではないかということである。そして第二に考えられるのは、一般に受け止められている1970年代以降のモラトリアムの担い手としての「若者」像(c)をそのまま研究者が「若者」と定義し、過去の同様の若者(b)にあてはめてその変遷を追っているのではないのかということである。

それに対し本稿の目的は、従来のそうした一元的な戦後「若者」文化史を批判的に乗り越えるための足掛かりを、「勤労青年」文化を考察することで提供することにある。「勤労青年」文化を明らかにしようとするこの試みは同時に、高度成長期民衆文化を若者に焦点を当てて明らかにしていく作業の第一歩としても位置づけられ得る筈である。

ところで、本稿において問題としている1960年代「勤労青年」に関して、1967年見田宗介によって行われた「全国青壮年意識調査」から極めて興味深いデータを紹介したい。同調査において、以下の選択肢の中でどれを日ごろ一番求めているのかという問いがある（「もっとよい収入」「住宅や土地」「もっと自由な時間」「もっと健康な身体」「打ち明けて話せる友人」「恋人や異性の友だち」「なごやかな家庭の幸福」）。これに対する答えでは、「つとめ先によって比較したばあい、注目すべきことは、つとめ人の中で『もっとよい収入を』第一に望む人の比率が」「一般に低賃金の零細企業で最も少ないということである」。かつ時間や住宅に対する欲求も高くないという。「では零細企業の労働者に目立って多い答えは何かというと、『打ち明けて話せる友人が欲しい』および『恋人や異性の友だちが欲しい』というもので、合計して一四・四％にまでのぼる」のだという。このデータを踏まえて見田は以下のように分析している。

「それは今日、零細企業にはたらく若者たちの、孤立感、疎外感の深さを物語っている

⁵⁾ 鶴見俊輔『日本の百年1 新しい開国』筑摩書房1961年、343-4頁。

ように思われる。一方において民青が、他方において創価学会が、さらにまた他方において、根っ子の会や志行会や働く九州っ子の会が、これら青少年の心をひきつけるものをもつのは、まずなによりも、このような疎外感、孤立感からの救済を約束しているからである」⁶。

見田の言う「疎外感、孤立感からの救済を約束」するそうした諸団体を加瀬和俊は以下の3つに分類し、それぞれの代表例を挙げている⁷。

雇用主協力型団体—若い根っこの会

雇用主警戒型団体—創価学会青年部

雇用主対抗型団体—民青

このうち後二者と比べた場合、前者は現在ではほとんどそのかつての存在すらも忘れてしまわれているように思える。しかし、前者に代表される、「勤労青年」のサークルは高度成長期当時広範な若者を集めていた。その背景には、中卒者の求人が求職者の数を大幅に上回り（労働力としての）中卒者が「金の卵」ともてはやされた、現在の就職状況からは想像もつかない当時の時代状況があった。地方出身の多くの中卒者が職場について不十分な情報しか与えられないままに見知らぬ大都会で就職し、他人の家に住み込んで働く生活を余儀なくされていたのである⁸。

そうした「勤労青年」サークルの数を当時の『朝日新聞』は（住み込み店員のサークルだけで）全国で約 500 存在していると報じている⁹。それらの中で最大規模を誇ったのが、最盛期には 32000 人を擁した¹⁰、加藤日出男（1929～）を会長とする「若い根っこの会」で

⁶ 見田宗介『現代の青年像』講談社現代新書 1968 年、54-5 頁。なお、このデータは 1959 年に労働省婦人少年局が行った「年少労働者余暇状況実態調査」の結果とも重なっている（労働省婦人少年局『年少労働者余暇状況実態調査報告書』1960 年、34、71 頁）。

⁷ 加瀬和俊『集団就職の時代 高度成長のいない手たち』青木書店 1997 年、204-18 頁。

⁸ 中卒者の就職状況については小川利夫・高沢武司編著『集団就職 その追跡研究』明治図書出版 1967 年、等を参照。

⁹ 「専用アパート」も続々 よくなる店員の待遇『朝日新聞』1961 年 7 月 24 日朝刊 10 面。

¹⁰ 2000 年 7 月 23 日に行った加藤日出男へのインタビューによると、名簿や会員が書き込んだ入会申込書などの当時の会員を知る上での基礎的なデータは現存していないという。また、若い根っこの会が社会的に評価されている時期においても、自分のところで住み込んで働いている従業員が他の職場の従業員と接触しその労働条件を知ることを警戒した雇い主は、従業員が根っこの会に参加することを禁じていた。そのため同会からの郵便物が届くことを恐れ入会せずに行事にだけ参加する者もいたという。同会の会費は現在でも半年単位で納入することになっているが、金がないため 2 ヶ月分しか払わない者もいた。そうしたメンバーは当時名簿に記載されていない。加藤によると、名簿に記載されていないメンバーも含め高度成長期の会員数は延べ 10 万人に上るのではないかと、いう。

あった。これだけのメンバーを擁していたということから同会はこのグループを代表するものであったと言える。更に、単に人数の多さということだけではない。藤井淑禎は、当時若い根っこの会に匹敵する存在感と影響力を誇ったのがスターや歌手の後援会活動・『平凡』『明星』『映画の友』の読者の会であったとした上で、次のように述べている。

「直接に会して泣き言をこぼしあうことに始まり、運動会やピクニックなどの諸行事に打ち興じ、さらには、会誌を通じて仲間と語り合う、といった親睦スタイルこそは、まさに根っこの会活動によって磨きをかけられ、歌手や映画俳優の後援会活動においても踏襲された、この時代に特徴的なコミュニケーション・スタイルだったのである」¹¹。

1960年代は「青年」から「若者」への移行期であり、その時代における「若者」という語の表象内容は二元的なものであった一方で、転換期である1970年代には一元的なものに収斂している。しかし従来の研究では1960年代から1970年代以降の一元的な流れのみが論じられてきた。こうした従来の一元的な議論を「正史」とするならば、「勤労青年」文化の姿は「稗史」¹²であると言えよう。こうした「稗史」としての1960年代「勤労青年」文化の姿とその変容を明らかにすることで従来の一元的な議論を乗り越えようとするのが、本稿の趣旨であった。それを鑑みると、高度成長期当時の「勤労青年」サークルを代表するものであり且つ「この時代に特徴的なコミュニケーション・スタイル」を備えたものである「若い根っこの会」を、「勤労青年」文化を論じる上で欠かすことは出来ない。しかし同会を手がかりに「勤労青年」文化の変容を考察する手段を考えると、同会の持つ「勤労青年」文化研究への有効性や次章で紹介する高度成長期の活動の全国的規模にも拘わらず、会を正面から扱った先行研究はおろか会史さえも存在していないことに気づく。また最早我々は当時の活動を同時代の者として体験することが出来ない。このように先行研究もなく当時の活動の参与観察も不可能な中で、全国から同会の活動に関する膨大な数の聞き取りデータ及び未発掘の資料¹³を収集しその精密な全体像を描き変遷を明らかにすることは、決して不可能だと断言することは出来ない。しかし、本稿の趣旨は高度成長期当時

¹¹ 藤井淑禎『望郷歌謡曲考 高度成長の谷間で』NTT出版1997年、108-9頁。

¹² 『加藤秀俊著作集3 世相史』中央公論社1981年、11-3頁。

¹³ 当時、本部の会報とは別に地方においても自主的に機関紙がつくられていた（大阪支部の『ふれあい』のように現在も発行されているものもある）。そうした機関紙や印刷物・スクラップブック・写真等の諸資料が現在でも個人宅で保存されている場合がある。

の同会の全国規模に渡る活動を精密に描き出すことではない。本稿の目的はあくまでも従来の一元的な「若者」文化史を批判的に乗り越えるための足掛かりを提供することにある。その趣旨を踏まえると、まずは会員によって残された言説の系統的な分析を通し「勤労青年」文化の変容のエッセンスを抽出することが、ふさわしい方法であると言えるだろう。以上述べたことから、次章においては、「勤労青年」文化を代表する同会の活動の全体像を明らかにすること及び3章への導入を図ることを狙いとして、本稿において注目している「青年」から「若者」への移行期である1960年代に絞り、同会の沿革を見ることにしたい。

2 「若い根っこの会」の沿革

2-1 前身

「若い根っこの会」の前身「あすなろ会」は加藤日出男によって1952年11月東京農工大学の学生を構成員としてつくられたサークルである¹⁴。これは会員の大学生が卒業するとともに自然消滅したという。東京農大卒業（1953年）後加藤は1954年1月23日、23人で「経堂青年会」を結成する。この「経堂青年会」において初めて「根っこ」という言葉が使われている。だが1955年頃の構成員は住み込み店員だけではなく大学生や会社員・公務員といったメンバーもそれぞれ3分の1ずつ含まれていた¹⁵。ところで、「経堂青年会」以降、同会における1954年から1957年までの活動を記録した加藤の処女出版『東京の若い根っこたち』（第二書房、1957年）・新聞記事によって「同心円的に」¹⁶会員が増え、加藤は運動の軸足を次第に住み込みで働く地方出身の若者へと移し、「雑草の会」（1957年10月）、「東京青年の会」（1958年春）とそうした若者のためのサークルを次々と作る。やがて1959年11月20日これら3つの会が「若い根っこの会」として統合された。

2-2 最盛期

加藤によると1959年から会員数が急激にふえ、1961～67年は絶頂時代であったという¹⁷。

¹⁴ 「あすなろ会」の結成は従来1953年早春とされていた（例えば、佐川典幸「若い根っこの会」『【縮刷版】大衆文化事典』弘文堂1994年、867頁）が2000年7月23日に行った加藤日出男へのインタビューでは実際に同会が活動をはじめたのは1952年であるという。

¹⁵ 加藤日出男・海老沢義道・三井為友（座談会）「青少年団体運営の苦心」『青少年問題』1955年9月号、22頁、加藤日出男『東京の若い根っこたち』第二書房1957年、82-3頁。

¹⁶ 加藤日出男「集団就職」エコノミスト編集部編『証言・高度成長期の日本』（下）毎日新聞社1984年、164頁。

¹⁷ 16に同じ。

この時期新聞紙上でも「根っこの会」の成人式・公園掃除・両親を招いての東京見物・合同結婚式・藪入り根っこ・映画製作等が盛んに紹介されている。またこの間の活動には、「活動」というよりも「事業」の域に入るものも見受けられる。それを以下に見てみたい。

①「根っこの家」開館（埼玉県川越市、1961年4月16日）。加藤・町田辰次郎電々公社社長・石田博英労相が先頭に立ってのパレードが行われた。これは、町田をはじめとする、低い学歴からたたき上げた「根っこ上りの財界人」¹⁸たちによる資金・300坪の土地の寄付によってバックアップされたものであった。同年9月29日「根っこの家」は財団法人の認可を受ける。「根っこの家」に隣接する「根っこの家2号館」（1964年）、また「関西根っこの家」（1971年）も開館している。

②「根っこ文庫（2000年9月25日より株式会社ルーツ海）」設立。任意団体である根っこの会は営利事業をすることができないため、1961年11月28日加藤は会の出版部門を株式会社根っこ文庫として設立。会員たちが1口500円の株を競って買い2週間足らずの呼びかけで104人が500円～5万円を出資、資本金100万円の出版社が出来上がった。会報『若い根っこ』（1966年に『月刊友情』と改題）は1962年から東販・日販によって全国の書店で販売されるようになり、毎月の広告収入が7～80万円にのぼるとともに、会報を見て入会する者が多数現れた。

③「根っこ銀行」運営。1口500円の預金を無利子で富士銀行に預け、その中から無利子・無担保で最高30万円までの独立資金を借りることが可能。1961年9月20日から約1年間運営。

④「根っこショッピングタウン」構想。2階建て1階には食料・衣料・雑貨などの専門店、2階には従業員の宿舎や娯楽ルーム。「成功すれば全国各地にも第二、第三の（引用者注、商業）団地をつくっていく」構想が加藤によって語られた¹⁹。

この時期の特色は、これ以前の時期とは違い、毎週数百人が訪れた「根っこの家」を中心とする関東地方だけに活動が限られたのではなく、地方においても会報を見た会員が各地で自主的に支部・グループを作り運営をしていったことにある。

例えば、郡山市在住の60歳の男性（学校用務員）からの聞き取り²⁰によれば、この男性は縁故関係で就職した酒屋で住み込み店員として働いており何も楽しみがなく、「当時いっ

¹⁸ 茅野真木子「根っこの会のビジョンと行動」『月刊労働問題』1963年5月号、32頁。

¹⁹ 「ぼくらの店ができる 若い根っこの会 自力で商業団地 専門店24店並べる 来年末、川越に完成」『読売新聞』埼玉版1964年12月18日における加藤のコメント。

²⁰ 1999年10月24日。

ぱい本屋で売っていた」会報を見て、友達が欲しいという思いから地方紙にPRを出したところ、1〜3人ずつ「仲間に入れてくれ」と輪が広がっていった。同市で会員は5〜60人を数えたという。活動は、郡山駅前を4、5人で清掃することから始め、月2回の集会で慰問・清掃・市長を囲んでの座談会・歌や話し合い・ベンチの修繕・ピクニックなどを行ったほか、両親を東京見物に連れていったこともあるという。また、会津で宮城・山形と3県で集会をしたり、バスを借り切って2、30人で「根っこの家」に行ったほか、自身も月2回土・日は「根っこの家」に出かけたという。「根っこの家」では相談に乗ってもらったり会員同士で励ましあったりした。

京都市在住の57歳の男性（工務店経営）から聞き取ったところ²¹によると、京都市では、月に2回の集会が行われ、野外で行なうときは、御所以外では、清滝や摂津峡・私市のハイキングコースに行ったという。また、集会では歌・ゲーム・話合いの時間が持たれた。施設への慰問も何年も行なっていたという。休みの日にお金を使わないで1日を過ごそうと思えばバス代とパンと牛乳代で「今日は楽しかった」と言って帰れる雰囲気があった。

「たまの休みに友達と会える、それだけでうれしかった。いくらバレーボールやソフトボールをして疲れても、明日から2週間頑張ろう、来月まで頑張ろう、というエネルギーになったと思う」という。1966年からは市内の公立の学校を1日借り切って根っこの会の運動会を行ない、そこではグループ対抗の形を取り各グループから4、50人ほど集まったが、京都グループが最も人数が多かった。1966年から2、3年は淳風小学校で行ない、次に下鴨中学校、それから大阪や神戸で持ち回りで運動会を開いたという。行事の会員への連絡は葉書で行なった。この男性はその葉書を書く中で漢字を覚えたのだという。

『平凡』1963年9月号の「根っこコーナー」では会員の地域別分布状況・男女比及び職業別構成比について以下のように紹介している。

「会員の分布は中央会員（埼玉・千葉・東京・神奈川）六八．一％ 北海道〇．二％ 東北一．五％ 関東二．二％ 北陸一．五％ 東海六．三％ 近畿一一．三％ 中国〇．七％ 四国〇．二％ 九州〇．五％ 沖縄その他〇．二％、男女の比率は男四六％、女五四％で、支部が大阪と名古屋にあり地方グループの集会も各県で開かれています」。

「職業もあらゆる職種の方がいます。圧倒的に多いのはお手伝いさんで三二．七％、つづいて店員三〇．六％、その他珍しい職業、日ごろはその存在すら知られていない本当の

²¹ 1999年11月9日。

根っこの職業の方も少なくありません」²²。

毎号の会報にはその月の全国の行事予定が掲載されているが、『平凡』でも触れられている全国展開している活動の規模をこの行事予定から窺うことにしたい。例えば、1970年2月号には同年1月の行事予定が掲載されているが、根っこの家での毎週の行事に加えて、北海道から九州まで、中央34地区・地方39支部グループの行事予定が掲載されている。更に大阪支部は25の地区に分けられている。

この当時の根っこの会の活動は、各種新聞・各種雑誌・テレビ・ラジオ・映画・舞台といった各メディアを横断した形で紹介されている。今日我々がそれを知る手がかりとしてスクラップブックを挙げる事が出来る。筆者が入手したものは、①根っこの家で保存されている20冊・②1963年に入会した大阪の会員が個人的に作成した1冊である。これらが全ての記事を網羅しているとは考えられないが、新聞地方版・地方紙の記事が多数収録されていることから、前述のように1960年代当時全国規模で活動が展開されていたことを知ることが出来る。また、根っこ文庫発行の単行本を原作にした映画やテレビドラマの或いは会員が出演したテレビ・ラジオ番組の紹介記事から、根っこの会が活字・非活字メディアを問わず取り上げられ社会現象となっていたことを窺い知ることが出来る²³。

²² 無署名「根っこコーナー 『うつむいていないで』 みんな仲間になろう!」『平凡』1963年9月号、210-1頁。『平凡』には1963年4月号から1965年1月号まで若い根っこの会の活動及びスケジュールを紹介するページが存在していた。加藤日出男への2000年7月23日のインタビュー及び同年8月27日の談話によれば、当時それを見て多くの若者が行事に参加していたのだという。『平凡』の読者層に関しては原喜美「青少年向け娯楽雑誌“平凡”にあらわれた価値指向」『国際基督教大学学報I-A 教育研究』7、1960年、を参照。

²³ 多様なメディア、中でも注22でも触れたように当時『平凡』『明星』が加藤及び若い根っこの会を盛んに取り上げていた（加藤「集団就職」164-5頁）にもかかわらず、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録件名編』の「サークル」の項で「若い根っこの会」を見た場合この両誌の記事は全く掲載されておらず他誌の2件が掲載されているのみである。また、同人名編の「加藤日出男」には同じく他誌の5件が掲載されているのみである。こうしたことが（特に若い）研究者が現在の時点から当時の若い根っこの会の活動を振り返ろうとした場合、当時加藤が勤労青年文化に持っていた影響力と社会現象ともなった当時の同会の活動の規模を見えにくくさせていると思われる。

3 手記に見る人生観の分析

3-1 手記の分類手順

1960年代という「青年」から「若者」への移行期における「若者」の主要な表象内容が「勤労青年」であったにも関わらず、従来の一元的な若者文化史においてはその文化へのまなざしが欠落していた。前章で我々はこの移行期である1960年代における「勤労青年」文化を代表する「若い根っこ会」の最盛期の活動を見た。それでは移行期で且つ一元化に進んでいく時期における「勤労青年」の意識の変容を同会会員の手記を通して考察することにしたい。

手記の分析に先立って会報の形態を簡単に紹介しておきたい。今回分析のために根っこの家よりお借りした保存用の会報には欠号が見られるため以下の紹介において不明な点が部分的にあることを、最初に断っておく。2-2で述べたように同会の会報『若い根っこ』（1966年より『月刊友情』と改題）は1962年度より全国の書店で販売されるようになった。会報のサイズは調査した号から現在に至るまでA5版であるが、1961年10月号が白黒写真の表紙・グラビア無しで86頁の構成であるのに対して、書店で販売されるようになった1962年以降は表紙がカラーになるとともに、頁数を徐々に増やし、同年8月号は210頁で構成されている。1963年1月号の構成は不明だが同年2月号にはモノクログラビアが登場しており、これ以降カラーの表紙でモノクログラビア・200頁前後の頁数という誌面構成が踏襲されている。毎号の誌面においては必ず巻頭に加藤の人生論が掲載されているが、調査した期間の前半の号の記事においては松本清張や本田宗一郎らを紹介した立志伝が、後半においては大学教授や文化人らの寄稿が目立つ。会員からの投稿がやはり誌面の核となっていることは調査した時期の会報において共通しているが、その投稿には、「生活（の）記録」（手記）・「文芸」・詩や短歌のコーナー・投書欄「若い広場」の4種類がある（前半の時期には新入会者の声の欄もあった）。また、不定期に加藤日出男の著書の感想文や特定のテーマを設定した作文コンクールに寄せられた作文が掲載されていることがある。

本章において会員による言説を分析する趣旨は、「勤労青年」文化の変容を明らかにし従来の研究を乗り越える若者文化史の構築のための足掛かりをつくるため、ということであった。それでは、この趣旨に最も適ったものがどれであるかを検討すると、会員の日常や意識が最もストレートに表現されている手記「生活（の）記録」欄を最優先すべきである。

それでは、書店での販売が始まった1962年から本稿で対象とする時期の終わりである1970年までの会報に掲載された計456本の手記を分析する際の手続きを以下に示す。まず、

実態のレベルが述べられている6種類の文脈・意識のレベルが書かれている6種類の文脈の計12種類の文脈の類型を設定する。その基準は以下の通りである。

まず実態のレベルを扱ったものは次の6種類である。

①は、生活上・工作上の単なるエピソード、もしくは自分の仕事の内容の紹介に終始しているもの。

②は本人もしくは手記の主人公に当たる人物に身体上のなんらかの不自由な要素があるもの。例えば、持病や障害はこれに含まれる。

③は家庭の経済的貧困。

④は片親、もしくは両親とも死亡。

⑤は家庭内暴力などの家庭不和。

⑥は過酷な労働環境。

次に意識のレベルを扱ったものを見る。

⑦は仕事の目標を書いているもの。

⑧は仕事に対する充実感或いは誇り等。

⑨は人生観全般。

⑩は世間・社会観。⑨・⑩は仕事の延長で書かれている場合が多い。従って広義の仕事観ということができる。

⑪は根っこの会会員の連帯の様子、もしくは筆者による連帯の呼びかけ。

⑫はなんらかの形で筆者が根っこの会に影響を受けたもの。

手記の分類に当たってはまず、それぞれの手記が②から⑫のどの内容が含まれているのかを分析する。その際、1つの手記の中に複数の内容が盛り込まれている場合は、その全てを分類の中に入れる。逆に、②から⑫のどれにもあてはまらないものは①に入れる。また、その手記が日常のエピソードの紹介に紙幅の大半を費やしている場合でもたとえ短くても②から⑫にあてはまる箇所があればそちらにカウントする。

このようにして各手記を年度毎に分類したものが表3-1-1である。また、この表においては（欠号の存在により）各年度の手記の総数にばらつきがあるため、各年度の手記の合計を100に換算して各分類に当てはまる文脈の数を年度毎にあてはめてできたものが表3-1-2である。

表 3-1-1 手記の分類結果の年度ごとの一覧表

年度	計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
1962	61	6	4	9	16	6	24	22	13	22	1	7	18
1963	158	19	8	37	29	12	85	58	36	65	7	23	48
1965	21	1	0	3	1	0	13	8	9	10	1	4	9
1966	31	3	5	4	6	0	14	7	5	19	2	3	6
1967	33	6	1	2	1	0	4	10	10	15	2	1	8
1968	35	8	0	0	4	1	4	4	8	17	0	1	11
1969	11	0	1	1	1	0	1	3	2	5	1	1	9
1970	106	9	15	7	4	3	11	19	21	60	7	12	46
総計	456	52	34	63	62	22	156	131	104	213	21	52	155

表 3-1-2 各年度の手記の総数を 100 に換算した場合の個々の類型にあてはまる手記の数

年度	計	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
1962	100	10	7	15	26	10	39	36	21	36	2	11	30
1963	100	12	5	23	18	8	54	37	23	41	4	15	30
1965	100	5	0	14	5	0	62	38	43	48	5	19	43
1966	100	10	16	13	19	0	45	23	16	61	6	10	19
1967	100	18	3	6	3	0	12	30	30	45	6	3	24
1968	100	23	0	0	11	3	11	11	23	49	0	3	31
1969	100	0	9	9	9	0	9	27	18	45	9	9	82
1970	100	8	14	7	4	3	10	18	20	57	7	11	43

このようにして作成した表 3-1-2 から以下の二点に特に注目したい。

まず第一に、「持病・障害」(②)「家庭の貧困」(③)「片親もしくは両親とも死亡」(④)「家庭不和」(⑤)は旧新宗教の入信動機である貧・病・争²⁴に該当するものだが、貧と争に当てはまる「家庭の貧困」(③)「片親もしくは両親とも死亡」(④)「家庭不和」(⑤)は減少している。特に減少が明らかであるのは貧に当たる「家庭の貧困」(③)と「片親もしくは両親とも死亡」(④)である。「過酷な労働環境」(⑥)も同じ頃から鮮やかに減少して

²⁴ 「旧新宗教」とは、創価学会・立正佼正会・PL 教団等を指す。これに対し「新新宗教」は、阿含宗・世界基督教統一心霊教会・幸福の科学等を指す。旧新宗教の入信動機「貧・病・争」とは、貧困・病気・家庭不和などの極端な生活苦を指す。

いる。また、いつ頃から減少しているのかを見た場合、1967年をほぼ境にしている。

第二に、「人生観」(⑨)と「根っこの会からの影響」(⑫)は特に分析の時期を通して手記の内容の核になっている。そのため、「人生観」(⑨)・「根っこの会からの影響」(⑫)の質について考察する必要がある。ただ、後者はもともと根っこの会から影響を受けたという文脈類型であったが、そうした影響を受ける(受けた)ことが筆者を引き続き根っこの会に参加させる動機となったと捉えると、影響と参加動機は密接につながっていることになる。従って「根っこの会からの影響」(⑫)は、以下の分析に当たっては、参加動機として捉えることにしたい。

以上のことから、以下では「人生観」(⑨)「根っこの会参加動機」(⑫)の質を検討するとともに、貧・争及び過酷な労働環境の文脈が減少した1967年以降にそれらの質がどのように変化しているのかを考察する。

3-2 人生観——「苦労型」「仕事型」

人生観は大きく二つの類型に分けることが出来る。その一つ目は苦労を人格の向上や幸福と結びつけて語る「苦労型」である(以下、表記は全て原文のまま。また下線は引用者による)。

「僕は仕事で苦労しているときが一番楽しい」

「苦労しているときが一番楽しいのだ、人間苦勞しなければいけない。樂して生きようとするのは間違っている」²⁵。

「私は今の苦しみから逃げ出してはならない。苦しみに打ち勝ってこそ幸福がおとずれるのではないかと、そう信じて今日も苦しみとたたかっています」²⁶。

「上京して三年あまりになるがあの時の苦勞(引用者注、酒浸りの父親による暴力、家庭不和、経済的貧困)は忘れろと言われても自分が背負ってきた不幸は忘れるものではありません。しかし苦しみや悲しみを乗り越えて行くことによって、少しずつみがかれて行くのでしょ。だから私に与えられた道と思って前進しなければいけない」²⁷。

²⁵ 菅生守「追いかけられる仕事の中で僕は生きるよろこびを知る」『若い根っこ』1962年5月号、73頁。

²⁶ 大池洋子「『つべこべいうな』と叱らないで」『若い根っこ』1963年7月号、57頁。

²⁷ 永島ふく子「大酒飲みは嫌だ!」『若い根っこ』1963年8月号、50頁。

このように苦労型は仕事・家庭環境両方と結びつけて語られているが、前者に結びつけたものの方が多い。

また、苦労型のバリエーションとして次のように苦労することこそ「青年として歩むべき姿」であるとするものも見受けられる。

「私達の望む事は路線に沿った平坦な道を歩み一生を終わるのではなく、荒波にのり、耐え抜く強健な根性と最後までやり抜く実践力によるむずかしい、つらいという中に生きがいを求め、追い続ける、これが青年として歩むべき姿ではないか」²⁸。

ところで、苦労型は1967年以降にも見ることが出来る。だがこの時期において目立つのは、苦労や努力に価値を認めつつも、直接人格の向上や幸福に結びつけるものよりも、より低次と見なされうるメッセージを発するものである。そうした発想をここでは「縮小」と名付ける。この縮小はその方向から「肯定型」「否定型」の二種類に分類することが出来る。前者は以下に見るものである。

「過ぎ去ったことを何時までもグジグジ考えていて、その妄想のために現実の今をお留守にする。これほど馬鹿げたことはないとおもう。ここに『苦しいときは何時までもあると思わず、必ず去るものと思え』のように、クヨクヨしたり、そのことばかり考えていて先に進むことを忘れてしまう、何もそれにこだわらずして、もっと前向きな考えをしなくてはならないとおもう」²⁹。

「始めは、どうやっていいものかと途方にくれたものだが、しみじみと『やればできる!』ということをかみしめることができたように思える」³⁰。

すなわち、苦労や努力の価値は認めているものの、人格や幸福と結びつけて語るのではない。苦労や努力を「前向きな考えをしなくてはならない」「やればできる」といった具合に人格の向上や幸福よりも縮小した肯定的な観念に結びつけることによって、苦労や努力の価値を認めているのである。

次に否定型のものを検討したい。

²⁸ 布施弘「身につまされたこと」『月刊友情』1968年4月号、78頁。

²⁹ 菅野正夫「今日は今日しかない」『月刊友情』1970年3月号、92-3頁。

³⁰ いもとまさひろ「私は農業一年生」『月刊友情』1968年10月号、130頁。

「大型化と弱少の両極へ別れていく食堂界、独立第一をかかげていた時代が後退し、独立という声が少くなり、独立がプラスか、マイナスか、と問われだした現在また、内外においては、資本自由化に突入し、外国資本の流入、それによって変化しつつある生活構造、通信、運輸の革命的発展により、世界の縮小と、世界を切りはなして考えられなくなってきた現在において、一体自分はいかに行動すればよいのか、ただ、金魚のフンみたいに時代の流れにまかせて平凡な一生を送るのか、一体自分の目的とするものの焦点は何なのだろうか、考えるにつれ、非力な自分がなさけなく思うときがある」

「ともかく、他に頼り自ら努力する意思のないことほど頼りなく、情けないことはない」³¹。

このように、否定型は、やはり苦労の価値は認めつつも、苦労をしない生のあり方を一旦想定しそれを否定するというスタイルをとる。苦労を直接に人格・幸福といった価値に結びつけて考えるのではなく、苦労をしない生のあり方を可能なものとして既に捉えた上で否定することで、苦労の価値を認めているという点で、縮小しているといえる。

更にここで紹介した手記が興味深いのは、苦労型の考え方が揺らいできた背景が述べられていることである。すなわち、社会の閉塞感であり、それは苦労を幸福に結びつけることにリアリティを付与するものではない。また、否定型に縮小した手記においては可能なものとして認識されている努力しない生のあり方は、従来の手記では選択肢として想定されてはいなかった。ここには、1967年以降困難な環境を述べた文脈が減少していること、更に言えば経済成長の結果があるであろう。加藤はこの当時のことを次のように振り返っている。

「昭和四〇年代（引用者注：1965～74年）に入ると、たしかに経済は伸びてはきたが、自分たちの将来はきわめて低成長だという気持ちになってきた。この世の中はなるようにしかならないのだと、ある意味で非常にさめてきたのと、あきらめではないが、資本主義社会の現状肯定派みたいなのがずいぶんとでてきた」³²。

ここからも苦労や努力を人格の向上や幸福に直接結びつけて捉えるのではない風潮を我々は読み取ることが出来る。このように我々は、苦労型のものを見、それが1967年以降変質していく過程を見てきた。それでは、「人生観」(⑨)の次のパターン・「仕事型」の検討に移るが、まずその典型例を次に見たい。

³¹ 白岩正信「自らをひらく」『月刊友情』1968年11月号、98-9頁。

³² 加藤「集団就職」、166頁。

「私の若くて変りがちな心を支えてくれたものは沢山ある。まず福沢諭吉翁の心訓がそう
だ。

○世の中で、一番楽しく立派なことは、一生涯を貫く仕事を持って居ることです。

○世の中で、一番みじめなことは、人間として教養のないことです。

○世の中で一番淋しいことは、する仕事の無いことです。

などなど……。

でも一番、大切な事は、それらの支えを信じる、私自身の強い意志を持つ事だと思い、
今は毎日毎日を大切にすごしている」³³。

つまり、仕事に励むことにこそ人生の意味がある、という考え方である。次に見るもの
もやはりそうした考え方が色濃く現れた典型例である。

「悔いなき人生は現在の仕事に全力をつくすと同時に、幸福は外から来るのではなく自分
の心の中から生まれる」³⁴。

「人生観」(⑨)の仕事型は「世間・社会観」(⑩)とつなげて語られていることが多い。
ところで見田宗介は日本の立身出世主義の「世界像的な前提」として「個人の野心の追求
と国家の興隆との幸福な予定調和観」を挙げている³⁵。これとの比較で、「世間・社会観」
(⑩)とつなげて語られた仕事型の「人生観」(⑨)を以下に検討してみたい。

「人がやらないような仕事をやるほうがどんなにやりがいがあるか、世の中のために役立
つ事だったらどんな仕事でもよい、働けることだけでうれしいのだ。

一日でも早く仕事を自分のものにして、世界一の技術者になるためがんばるのです」³⁶。

「これからの私は洋裁学校、お手伝いという仕事にほこりを持ち、正しい人間、道理の正
しい人間になり明るい世の中、貧乏の人のないような世の中にしたい」³⁷。

³³ 藤田伝「袋物加工 この道を歩んで」『若い根っこ』1963年6月号、52頁。

³⁴ 阿部皓司「さあ、生活にエンジンをかけよう」『若い根っこ』1963年6月号、55頁。

³⁵ 見田宗介『現代日本の心情と論理』筑摩書房1971年、195頁。

³⁶ 原敏「ペンキ塗り絵かき人生」『若い根っこ』1962年8月号、52頁。

³⁷ 梅沢栄「涙でのどが痛い」『若い根っこ』1965年1月号、92頁。

「それでは、どんな働きが、実る働きになるのでしょうか。

まず働きの目的が大切です。働きの目的が自分の利益にだけ、つながっていたのでは、結果が逆になってしまいますから、いつでも相手の利益、社会公共のために、どれほどお役に立つかということに目標をおいて下さい」³⁸。

ここに見る社会観は決して予定調和的なものではない。また、加藤日出男へのインタビュー³⁹によると、加藤自身当初は会員たちのことを政治的な関心の薄い層だと思っていたが、実際は投票率が高く選挙の投票券が送られてくると感動しあっていた、棄権率が乏しく、会での成人式を派手にすることができたのだという。こうしたことを踏まえると、ここに我々は、自分が仕事・投票を通して直接社会に参加することで社会を良くしていこうという意識を見ることが出来る。

社会に貢献するという文脈のうち、より具体的なものは以下のようなものである。

「私は自分自身で学びとったことを大切に、これからも広い知識と高い技術、そして、大きな人間愛を目標とするナースの道を一步一步踏みしめながら近づいて行こうと思っています。

愛らしいチビッコ天使たちのために、いいえもっと多くの患者さんたちのために、私自身せいいっぱい生きるためにも」⁴⁰。

ところで、この仕事型の文脈も 1967 年以降には違った形のものが現れている。

『今日はちょっと無理だな。ちょっと高いもの買っちゃったもんな』。『うん、でも買うときは良いものを買った方がいいよ』。『あとは来月にしよう』。来月は月賦も終わるしな」こんな会話をしている時、ふっと僕もそして弟も働くことの喜びを、働くことの楽しさを感じるのである仕事をしているときは、つらい時の方が多いけど、そんな時は来月は何も買って、貯金はいくらして。いつものように考える」⁴¹。

ここでは、働くことの喜びが人格よりも金銭と結びつけて語られている。

³⁸ 山下ヒサ子「実る働き」『月刊友情』1967年2月号、128頁。

³⁹ 1999年9月26日。

⁴⁰ 岩崎礼子「チビッコ天使と私」『月刊友情』1970年4月号、69頁。

⁴¹ 楠森信義「仕事をする喜び」『月刊友情』1968年10月号、132頁。

「ただ、生きていく一つの手段として今の仕事を選んでいるだけ。だからどうしても不都合なことが起れば別の仕事についても一向にかまわないのです。どんなことをしてでも生活していく自信はあるし、少なくとも仕事が全てなどという人間にはなりたくないからです」。

「仕事の他にも楽しみはいくらでもある」⁴²。

つまり、以上の2つのような、それまで見られた「人生観」(⑨)の2種類(特に仕事型)の内容に反する内容のものが現れている。

3-3 根っこの会参加動機

まず、根っこの会にどのように影響を受けているのかを見ると以下のようなものがある。

「苦しい仕事だが苦しくはないぞ、まだまだ苦しい仕事に負けずに笑顔で働いている仲間がいるんだ。文集をみると勇気が出て苦しさの中にも楽しさがこみ上げ、あしたに向かって頑張っている」⁴³。

「どうにか仕事にも馴れて心も楽になりかけたころ、また田舎にいる父が再三入院しなければならなくなったのです。その時はもう運命をのろい神をにくみました。なぜなぜ私達だけがこんな目に……と毎日考え込む日が多くなり、仕事にも身が入らなくなっていました。その頃ふと本屋で見つけた若い根っこの本を手にして同じような人達が同じようなことで苦しんでいるのを知り、勇気が出てきました。私だって負けてはならない、こんな事ぐらいでと思いなおし、思い切って田舎に帰って母と相談した結果、やっぱりこの道を進むことになった」⁴⁴。

「そんなとき、本屋で根っこの本を見つけました。

本を読んでいいるうちに、私の心は変っていく思いでした。

なんて素晴らしい言葉なんでしょう。根っこ根っこ…私はもう一人ぼっちではなくなっ

⁴² 原幸男「悲しみのからを破ろう」『月刊友情』1970年2月号、78-9頁。

⁴³ 浅井茂「ぼくの汗と涙で建てた家」『若い根っこ』1963年8月号、108頁。

⁴⁴ 三瓶いく子「なつかしい思い出」『若い根っこ』1963年11月号、71頁。

た。こんなに大勢の根っこがいる。

私は勇気が出てきた。もう悲しくも淋しくもない。大きな夢と希望をもって、強く生きていくことを私に教えてくれた本、私も今すぐに会員になりたい。心はすでに会員になった気持ちで嬉しくてたまらなかった。

私は久しぶりで笑った。笑う事さえ忘れていた私が笑った……」⁴⁵。

「僕も根っこの会へ入ってからは心も明るくなり、また良いお友達を持って幸せです」⁴⁶。

「根っこの会に入会したことは、私にとって青春時代の最大の変化と思う」「毎日の生活に笑いをもち、仕事にも張りが出るようになった」⁴⁷。

「今日からは、一人ぼっちでない。根っこの仲間がいるのだ。苦しんでいるのは私だけではない。こんなに大勢いるのだ。夏もすぎ秋から冬である。今年の冬は寒くない。根っこ同志でおしくらまんじゅう（身と身をおし合い暖かくすること）をして、寒い冬はあつという間にすぎて暖かい春だ」。

「もし、私が根っこの会の皆さんを知ることが出来なかったら、今日の私はなかったかもしれせん。そのためにもいつまでも根っこの会員であり、根っこ活動を続けて行きます。あせることなく、一步一步進んでいきたいのです」⁴⁸。

このように、自身が置かれている環境に立ち向かっていく、もしくは「仕事の目標」「仕事に対する充実感・誇り」「人生観」「世間・社会観」(⑦～⑩)への意識を強化する機能を根っこの会が担っていたと言うことができよう。実際のところ、1つ目の手記は「過酷な労働環境」(⑥)「仕事の目標」(⑦)「人生観」(⑨)とともに語られ、2つ目は「家庭の経済的貧困」(③)「過酷な労働環境」(⑥)とともに語られ、3つ目は「過酷な労働環境」(⑥)「人生観」(⑨)とともに語られ、4つ目は「過酷な労働環境」(⑥)「仕事の目標」(⑦)「仕事に対する充実感・誇り」(⑧)と語られ、5つ目は「仕事に対する充実感・誇り」(⑧)、6つ目は「過酷な労働環境」(⑥)「仕事の目標」(⑦)「人生観」(⑨)とともに語られている。

⁴⁵ 正木久子「すばらしい縫子」、『若い根っこ』1965年1月号、96頁。

⁴⁶ 藤原時男「職人って、辛いよ」、『月刊友情』1967年5月号、82頁。

⁴⁷ 重松よし子「お姉さん、ありがとう」、『月刊友情』1967年7月号、64頁。

⁴⁸ 北堀勝則「下積み生活十一年」、『月刊友情』1968年5月号、117頁。

こうした連帯は、上の手記に見るように、集会（加藤の話を聞いたり会員達との対面的なコミュニケーション）への参加或いは（特に仕事が忙しくて集会に参加できない場合は）会報を通したものであった。

だが、それ以外のものとして次に見るような形での連帯によって励ましを得ているものもある。

「都会のあちこちで僕と同じような根っこ達が頑張っていると思うとうれしくなる。頼もしくなる」⁴⁹。

「毎日口ずさんでいた好きな詩、『美しい花を見て根っこを思う人は少ない……』初めは小さな根っこだ。今日から泣いてなんかいられないと、人一倍元気をつけましたのも文通で多くの人達ができた事です。励ましの文章、苦しかったことなど節々と繰ってありました。今では文通の数も（一人の人で）十通以上になり、会って心から語り合うように進み、張合のある生活が続いています」⁵⁰。

「ぼくがこの赤十字病院に入院するのは、これで三度目である」。

「でも、根っこの会に入っていた関係で、独りぼっちじゃない、皆ががんばれといっているのがきこえてくるような気がした。つくづくいい会に入っただと感じた。僕は幸せ者だ」⁵¹。

このように、自分で頭の中に会員達の姿を描くことで意識を強化したり、また文通によって励ましを得ているものも見受けられる。我々は先にこうした連帯が、自己の置かれた環境に立ち向かっていく或いは仕事などへの意識を強化する機能を果たしていたことを見た。これは調査した期間において一貫して存在するものだが、1967年以降には会に求めているものの質が異なってくるのがわかる。次にそれを見ていきたい。

「今では十九才、もう大人です。でも二度とない青春時代を楽しくすごそうと思っています。若い根っこの会を知り、入会をして、集会に出席して一番印象に残っている事は、皆

⁴⁹ 笹倉義樹『なかくようせんとあかんで』主人のことばが僕の中にのこる『若い根っこ』1962年5月号、75頁。

⁵⁰ 若井文子「なつかしい泣いた日の思い出」『若い根っこ』1963年12月号、65頁。

⁵¹ 道下幸雄「助けられながら生きる」『月刊友情』1967年2月号、122-3頁。

様がとても明かるく自分から進んで何んでもやる！ということです」⁵²。

「仕事が済めばブラブラしていました。そんな時、若い根っこの会を知り入会しました。
若い日は二度とないという言葉に毎日がもったいなく思いました」⁵³。

この両方の手記は貧・病・争或いは「過酷な労働環境」(②～⑥)とともに語られていない。また、根っこの会に求めているものもいわば思い出作りとなっている。加藤は1965年頃から会員がドライになるにつれ会に来る目的が変わり、会がそれまでの盆踊り的なものからフォークダンス的なものになっていった、と述べている⁵⁴。上の手記に見る根っこの会参加動機の緩やかな変化はそれに対応しているものと見られる。また、ネガティブな実態を述べたものが1967年から減少しているように、同じく加藤によると1965年当時零細企業の賃金は2倍に上昇し、会員達もかなり経済的に豊かになっていたという⁵⁵。そのことが手記に見る根っこの会参加動機の緩やかな変化の奥にある高度成長期の社会変動であろうが、これについては4章で検討することにした。

上記のことから、前半の時期においては、会員が当時の社会の中でおかれた厳しい環境の中ですれば弱くなる可能性のある、環境に立ち向かう意識或いは「人生観」等の意識を再び強化する機能を根っこの会は持っていた。勿論、皆が皆そういう機能の恩恵に浴していたわけではない。

しかし、会員のおかれた環境が良くなっていくにつれ、また経済成長とともに社会に閉塞感(加藤の言う「自分たちの将来はきわめて低成長だという気持ち」)が現れ、1967年頃から意識の変質が見られる。

それは、(1)人生観の苦労型における肯定型・否定型両方向への縮小傾向が現れたこと。(2)人生観の仕事型の社会貢献から私生活へのベクトルの方向転換。(3)(1)・(2)に伴う、意識の強化から思い出作りへの根っこの会参加動機の変化、である。

⁵² 沢村美江子「誠実と努力を大切に」『月刊友情』1968年10月号、126頁。

⁵³ 上野房枝「根っこの会に生きがい求めて」『月刊友情』1968年12月号、114頁。

⁵⁴ 加藤「集団就職」、167頁。

⁵⁵ 同166頁。

4 結論

4-1 議論の要約——「勤労青年」文化における人生観の縮小

以下にこれまでの議論を簡単に振り返りたい。

1960年代は「青年」から「若者」への移行期であり、当時の「若者」の表象内容は「勤労青年」とモラトリアムの担い手の二元的なものであった。そしてそれが転換期である1970年代一元化する流れがあった。しかし従来の研究において問題にされてきたのは一元的な移行のみである。それを乗り越えるには、1960年代「若者」の主要な表象内容である「勤労青年」文化の姿及び変遷を明らかにしていくべきであった。そしてその「勤労青年」文化の代表性を持つものとして「若い根っこの会」があった。また「勤労青年」文化の変遷を知るには会員による言説を分析するという方法を採用ことにした。これが1章での議論である。

続く2章においては「勤労青年」文化の一端を明らかにするために、また3章においてその変容を明らかにする導入のために、当時の会の活動を明らかにした。

3章で行った会員手記の分析において我々が特に注目せねばならないのは以下の点である。それはすなわち、まず貧・争あるいは過酷な労働環境といったネガティブなものが1967年を境に影を薄くし、それとともに起きた二つの位相における変化である。第一に、人生観において、苦労型の文脈は肯定型・否定型の両方向に縮小していく。また、仕事型のものも私生活中心の方向に変質したものが現れる。第二に、根っこの会参加動機が意識の強化から、思い出作りへと変質していく。

それはなぜか。以下に検討しておきたい。

4-2 まとめ——人生観の縮小をもたらした二つの位相

人生観の変容、特に苦労型の縮小の原因を我々は次の二つの位相に求めることができよう。

まず、第一に1967年当時の会員の気質にその原因を求めることができよう。当時の会員の中にあった閉塞感については、3-3で加藤の証言を見たが、加藤は次のようにも述べている。

「普通労働組合の賃上げ要求でいま一〇万円とっている人が二〇万よこせとは要求しませんね。ところが、その当時の零細企業を含めた中小企業の給与は、倍に近いくらい上がりました。あっという間でした。給料が安くて風呂代もないとボヤいておったのが、ほんの

わずかのあいだに貯金が何十万円とたまつたと自慢するほどになった」⁵⁶。

苦労型の縮小したもののうち、否定型のものは、努力しない生のあり方を可能なものとして想定した上でそれを否定するという構造を、もっていた。そうした選択肢は、上に挙げた背景があつてこそ存立可能なものとなる。

表 4-2-1 は、中卒者高卒者の初任給を 1955 年から 1975 年まで 5 年ごとに見たものであり、表 4-2-2 はそれに消費者物価指数 (CPI) を用いて換算し求めたものである。これを見ても、事実、中卒・高卒の両者とも 1960 年から 1965 年までの伸びが、他の期間と比べて最も大きい。中卒者に関しては、他の時期が 5 年前と比較して 1.3 倍程度の伸びであるのにもかかわらず、60 年から 65 年までにかけでは 1.7 倍の増加をみている。高卒者に関しても、5 年間で 1.5 倍以上伸びているのは、60 年から 65 年までの 5 年間だけである。高度成長の結果としての「豊かさ」と閉塞感、これがこの時期の人生観の変質の背景であろう。

こうして当時の「根っこ」に当たる人たちがそれまでにはなかった経済的な豊かさを手にすることは、この人たちの後に続いて就職する人たちにとっては「過酷な労働環境」(⑥)に直面する可能性が始めから乏しいものとなることを意味する。また、それまでの家庭環境においても、貧・争に当たる文脈 (③④⑤) は、前にも見たように減少している。更に、進学率の上昇により、こうした「根っこ」に当たる人たちがそのものがその姿を社会から消していくのである。表 4-2-3 は中卒者の進路状況を 1950 年から 75 年まで 5 年ごとに見、最後に最近のデータと比較したものである。中卒時に成績や家計のためにクラスが進学組と就職組の二つに分けられ、後者が前者に対してコンプレックスを持ったという話は、75 年の段階ではもうほぼ過去のこととなっている。同様に高等学校卒業生に関するデータをまとめたのが表 4-2-4 であるが、ここでも 65 年の段階で高等学校卒業生の 4 分の 1 が大学等に進学し、現在では就職する者を上まわってさえいる。こうしたことから我々は、先に見た第一の位相をも含んだ第二の位相を目の当たりにする。それは、高度成長が農村から都市へ大量の「若者」を流出させ多くの「根っこ」を生み出したが、高度成長の結果による農村をも含めた進学率の上昇等により、「根っこ」が急速に姿を消していく位相である。

⁵⁶ 同 166 頁。

表 4-2-1 初任給の推移 (円)

区分	中学校卒	高等学校卒
1955 年	4,000	6,350
1960 年	5,760	7,740
1965 年	13,280	16,030
1970 年	23,300	27,300
1975 年	56,200	67,800

(資料) 労働省「新規学卒者の職業紹介状況及び初任給調査の概要」
この調査は 1954 年 3 月より行われているもの。

表 4-2-2 各年度の消費者物価指数を用いて換算した初任給の推移 (円)

区分	中学校卒	高等学校卒
1955 年	23,100	36,700
1960 年	30,500	41,000
1965 年	52,100	62,900
1970 年	70,200	82,200
1975 年	97,600	118,000

(資料) 総務庁統計局『消費者物価指数年報』
現行の物価指数 (1995 年度基準) は、総合卸物価指数は 1960 年度以降から、消費者物価指数は 1955 年度以降から比較可能となっている。

表 4-2-3 中学校卒業後の進路状況

区分	高等学校進学率	就職率
1955 年	51.5	42.0
1960 年	54.9	35.8
1965 年	70.7	26.5
1970 年	82.1	16.3
1975 年	91.9	5.9
1997 年	96.8	1.4

(資料) 文部省「学校基本調査」

表 4-2-4 高等学校卒業後の進路状況

区分	大学等進学率	就職率
1955 年	18.4	47.6
1960 年	16.6	60.1
1985 年	25.4	60.4
1970 年	24.2	58.2
1975 年	34.2	44.6
1997 年	40.7	23.5

(資料) 文部省「学校基本調査」

高度成長の結果による当時の「根っこ」たちの意識の変化に決定的に拍車をかけたのが、この第二の位相であった。そのため、苦労型の人生観は、そのリアリティを変質させただけでなく、その担い手をも失うのである。そうして高度成長時の産物にほかならない「根っこ」の流れは 70 年代以降の「若者」に回収されてしまう (従って 1 章で見た(a)(b)から(c)への移行は、新聞記事だけではなく実態にもほぼあてはまると言えよう)。これが「青年」から「若者」への移行期である 1960 年代から転換期である 1970 年代へと移る最中に起こった事態であった。

5 おわりに

現在の「若者」の文化やパーソナリティーを歴史社会的に説明しようとした従来の試みにおいては、冒頭でも述べたように特に高度成長期に関しては対抗文化や消費の文脈で語られることが多かった。しかし、戦後から現在に至る「若者」文化の筋道を歴史社会的な文脈から包括的に捉えようとするならば、それだけでは不十分であろう。1960年代の「青年」から「若者」への移行・1970年代の転換を、そして高度成長に伴う先に述べた重層構造から一元化への過程を、捉えきっていないからである。この年齢層の文化に関して、高度成長期に現れた、或いは現れたがドラスティックな形で消えていった新奇なものの中に現在の若者文化への連続性を見いだしていくのは、それが持つ新奇性ゆえに比較的容易なことと言えよう。しかし、高度成長期の中でいつの間にか見えなくなってしまったもの、衰退してしまった意識をも捉えていかなくは、現在の若者文化及び意識を歴史社会的に説明したことにはならない。

高度成長期は我々の生活と社会意識に大きな変動をもたらしたが、我々はそれを対象化することの出来る時点によりやく立つに至っている。そしてそうした時代に生きる我々にこそ、その変動にまつわる記憶が風化し当時の記録が埋もれてしまわないうちに文化変動の全体像を明らかにし、今日にまでつながる歴史の中に位置づけていく義務がある。その作業の過程においては、高度成長による大きな変動のうち、(本稿の例でいえば消費文化や対抗文化など)目に付き易いところだけではなく、より日常と接しているために変動が目につきにくかったところをも射程に入れねばならないことは言うまでもない。それどころか我々がより重点を置くべきは後者である。

1章でも述べたように、本稿は文化変動の全体像を歴史社会的に明らかにしていくための第一歩のささやかな試みである。

付記：本稿執筆にあたり御理解と御協力をいただいた、若い根っこの会の加藤日出男会長並びに根っこの家職員の皆様・会員の皆様に心から御礼の言葉を申し上げたい。なおインフォーマントの年齢は調査当時のものである。

(さかもと ひろし・博士後期課程)

Culture of Young Laborers in Post-War Japan: Change in the View on Life from the Notes of 'Wakai-Nekko-no-Kai' Members

Hiroshi SAKAMOTO

In this paper, I shall survey the changes of working youths' social consciousness during the 1960s, by analyzing notes of a young people's association called 'Wakai-Nekko-no-Kai'.

In the 1960s the word 'seinen', which stood for younger generation, was gradually displaced by the word 'wakamono'. Formerly, the word 'wakamono' referred to both those who have jobs and those who do not, while in 1970s it came to represent only those who were in the moratorium period. Former researchers of post-war youth cultures have dealt with the issue of 'wakamono' after the 1960s, but not the above-stated process of unification then. This study intends to overcome these limitations by focusing upon the historical transformations in the cultures of young laborers, especially 'Wakai-Nekko-no-Kai'.

Hideo Kato founded an association called 'Asunaro-Kai' in 1952, and then, their activities were taken up by an association 'Wakai-Nekko-no-Kai' in 1959. The 1960s was its heyday, when they had as many as 32,000 members all over Japan, and their activities attracted a lot of media concern.

By investigating the notes of the members, I have found out following changes in the culture of young laborers in the 1960s: firstly, depictions of poverty, illness or severe work conditions have started to decrease since 1967. Secondly, direct association of hardship to the attainment of happiness or improvement of his/her character also disappeared. It follows that the ideology of hard working becomes weakened, and that a new attitude emerges where greater importance was attached to one's private life. Thirdly, motives of joining 'Wakai-Nekko-no-Kai' changed from fortification of a will to confront harsh reality to making memories.

To explain these changes in young people's view on life, I have identified two social factors: firstly, due to Japan's rapid economic growth in 1960s, wages rose and poverty decreased. Secondly, as opportunities of higher education expanded, there was not the same amount of young people who would support older view of life.

Japan's economic growth has caused great changes on our life and social consciousness since the 1960s. It is time when we should look back at what has happened and take them as an object of sociological consideration. This is the first attempt of it.